

母子のかかわり行動の発達的变化（3）

後藤恵美子¹・多田裕美²

（¹北星学園大学社会福祉学部・²札幌市教育センター）

【目的】 前報（2010）では、母子間の「関係そのもの」を捉えるために開発した分析法（後藤、1995）を用いて、主として乳幼児期の母子のかかわり行動の時間の経過による変化について検討した。

本研究では、音声言語の基礎となる、前言語期の表出行動も含めた音声言語行動に視点を当てて分析し検討する。

【方法】 分析対象： 2組の女兒とその母親を対象とし、生後7カ月から23ヶ月に至るまで、それぞれ計4回、母子のあそび場面をビデオカメラで撮影した。

分析方法： 母子のあそび場面で観察される発話行動・表出行動を全て文章化し、その資料を基に、相互作用過程分析法（後藤、1993）の分析単位により整理し、言語関係カテゴリーを用いて分析する。

【結果と考察】 言語発達において重要な役割を担っている、物を介したやりとりの三項関係の成立に関する研究（辰野他 1979、稲月 2004）で、早い時期から母親は、子どもの意図をくみ取り、あるいは視線のやりとりにより相互作用を開始していることが示されている。前報の分析の結果、物を介したやりとりは2組の母子共に、月齢に伴い増加の傾向が示された。また、母子のかかわり場面の観察から、子どもが物にのみかかわっている際、母親からの子どもへの直接的かかわりは見られないが、間接的な母親の「見守るといのかかわり」が多く見られ、やりとり成立に影響していると推察された。本研究では前言語期の表出行動も含めた音声言語行動に視点を当て分析することにより、物を介したやりとりとの関連についても検討した。

図は、両対象児の音声言語行動の生起率の変化を、時間の経過に沿ってグラフに表したものである。言語関係カテゴリーは、音声言語行動と非音声言語行動Ⅰ、非音声言語行動Ⅱの3群に分類される。音声言語行動は、要求、質問、報告、教示、応答、発声の下位カテゴリーから構成されている。非音声言語行動Ⅰは、音声言語行動のカテゴリーの意味内容に準じており、表情や動作で表出される行動である。非音声言語行動Ⅱは、物を注視したり、物を使って遊ぶ等の「Object 関係」のカテゴリー、相手の動作やことばに注意を向けたり、物の受け渡し等、直接、他者との関係性を有する「M-C 関係」のカテゴリー、および「その他」のカテゴリーから構成されている。

生後7カ月から23ヶ月という時間の経過に沿って、「音声言語行動」の生起率を見てみると、A児は11.0%、6.7%、7.1%、28.3%となる。B児は2.3%、4.0%、21.2%、23.1%、と変化している。7ヶ月から11ヶ月にかけて、両児共に低い割合を示し、「あっ、ワー」などの発声のみの音声言語に留まっていた。23ヶ月時では発声に加えて、報告、呼びかけ、反復・模倣など表出の内容が豊かになっている。同様に、前言語の表出行動である「非音声言語行動Ⅱ」の生起率は、A児は、88.1%、88.9%、89.2%、68.1%となり、B児は、94.6%、91.0%、76.8%、75.1%と変化している。A児は15ヶ月から23ヶ月にかけて、物との関係、人との関係という二項関係を表す「非音声言語行動Ⅱ」の割合が減少し、B児はA児よりも早い時期の11ヶ月から15ヶ月にかけて、その割合が減少の傾向を示した。両児の変化の時期に違いはあるが、共に音声言語行動の割合が高くなると、それに呼応して、前言語の表出行動である非音声言語行動の割合が低くなっている。先行研究（辰野他、1979）結果と発達の方向が同じであることが示された。

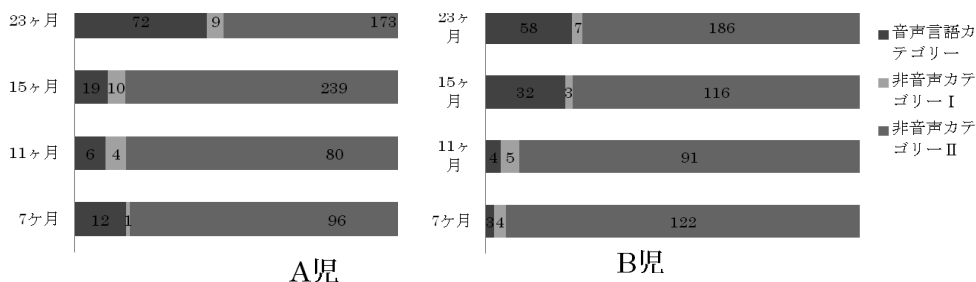


図 音声言語行動の生起率の発達的变化（グラフ内の数値は生起数）